



Title	殺害の時間の問題：出来事に関するD.デイヴィドソンの見解をめぐるある論争について
Author(s)	柏端, 達也
Citation	年報人間科学. 1993, 14, p. 117-130
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10133
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

殺害の時間の問題

—出来事に関するD・ティヴィードソンの見解をめぐるある論争について—

柏端 達也

1. 殺害の時間の問題

一九七〇年代の初め、次のような問題が、出来事に対するティヴィードソンの考え方に対し、複数の論者からそれぞれ独立に提出された⁽¹⁾。

たとえばジーンズがスミスを銃で撃ち、それがもとでスミスが三時間後に死んだとする。その場合次のように言うことは正しい。

(a) スミスが死ぬ三時間前にジーンズがスミスを撃った。

(Jones shot Smith three hours before Smith died.)⁽²⁾

スミスの状況で次のように並べる問題はない。

よいたる。ジーンズがスミスを撃ったのは一回だけであり、また（きわめて常識的に）スミスの死も一回だけであったと仮定しよう。すると(a)の代わりに次のように「言つ」とができる。

(b) スミスの死の三時間前にジーンズによるスミスの狙撃があった。(The shooting of Smith by Jones occurred three hours before Smith's death.)

問題が個別的な出来事についてのみのやあるいはそれを明確にした方が

じりじりジーンズがスミスを殺したのやたたた一回やあいたふ考え

るべきだ。もし、撃つ」と「由て、ジョンソンがスミスを殺した」のようない状況において、そのジョンソンによるスミスの殺害とジョンソンによるスミスの殺害の関係は、どのようなものであろうか。デイヴィッドソンならそれは同一であると言ふだろう。すなわち、

(d) ジョンソンによるスミスの狙撃=ジョンソンによるスミスの殺害。(The shooting of Smith by Jones=the killing of Smith by Jones.)

この結論は「デイヴィッドソンの出来事に対する考え方を特徴づけるものである。私は、上記した状況において(2)のような同一性声明が成り立つところ「テーゼを、「デイヴィッドソンの同一性テーゼ」と呼ぶうと思う。⁽⁴⁾

だが(1)で問題が生じる。その同一性声明(a)と(b)から、

(e) スミスの死の三時間前にジョンソンによるスミスの殺害があつた (The killing of Smith by Jones occurred three hours before Smith's death)

が導き出されるのである。上の(c)には奇妙な響きがある。個別的な出来事を指示する単称名辞を使用しない形——たいていは「」の形で問題にされるのであるが——にすると、奇妙さがはつきりするかも

しない。

(e)や(f)が看過できないほど奇妙であり間違っているのなら、(a)か(2)に至るまでの(1)にかに不都合があつたのである。

たしかに上の議論は、一見して、(a)を受け入れるとの不条理を示しており、デイヴィッドソンの同一性テーゼに対する反例を提供するようである。事実、A・コールドマンとJ・キムはそろって(1)の議論はデイヴィッドソンのテーゼに対する決定的な反証とならない。

問題点を次のように言い表すことができるだろう。もし(e)や(f)が正しいのなら、ジョンソンによるスミスの殺害はスミスの死の三時間前に終了していることになる。しかし現実にわれわれは、ジョンソンによるスミスの殺害が終了したあとスミスが死ぬまで「ジョンソンがスミスを殺した」「ジョンソンによるスミスの殺害はすでに終了した」と言つうことができない。そのため、何人かの論者は、いつジョンソンがスミスを殺したのかという点に関して——つまり殺害が占める時間領域に関して——デイヴィッドソンが述べたことは間違っている、という結論に達した。それにともなつて彼らの側では次のような問題が生じる。すなわち、それではいつたいジョンズはスミスをいつ殺したのか。ジョンソンによるスミスの殺害はい

(f) スミスが死ぬ三時間前にジョンソンがスミスを殺した。(Jones killed Smith three hours before Smith died.)

つ起こったのだろうか。⁽⁶⁾

以上のいわゆる殺害の時間の問題に関して、その後多くの哲学者が様々なことを述べたため、状況は一見錯綜している。しかしながらデイヴィッドソンに対する諸反論を整理すると、その中に、二つの比較的首尾一貫した立場を見い出すことができる。前述の同一性テーブはその整理の際の一つの重要な指標となる。以下ではまず、デイヴィッドソンに対抗するそれら二つの立場を順に検討する。そしてそのあと、殺害の時間の問題をめぐる論争とは結局何であったのか、それが示唆するものは何であるのかということについて、八十年代以降の出来事論および行為論の展開を踏まえて、述べてみたい。

2. 殺害は狙撃よりも長い時間領域を占める 別の行為であるという立場

ある論者は次のように考える。スミスが死ぬ前に「スミスの殺害はもう終わった」と言うのは正しくない。その時点での行為はまだ終わっていないのである。スミスの死によって、はじめてその殺害は完了する。ジョーンズによるスミスの殺害は、スミスの死を含んでおり、ジョーンズによるスミスの狙撃よりも長い時間領域を占める別の行為なのである。⁽⁷⁾ 殺害の時間の問題を最初に提起したレーヴィス、およびJ・J・トムソンは、二人ともこのように考へ、(d)を退ける。するとたしかに、厄介な(e)や(f)は導出されない。「いつジョーンズはスミスを殺したのか」という問い合わせに対するト

ムソンの答えは次のようなものである。ジョーンズによるスミスの狙撃が一九九二年一月一日の正午、スミスの死亡が同日午後三時であったとしよう。すると問い合わせ、「一九九二年の一月一日に殺した」あるいは「殺害の開始時間は一日正午、完了時間は同日午後三時である」というものである。⁽⁸⁾ 出来事が生起した時点を細かく特定することに限界があるといふことに關して、(その論点がここで関係するかどうかはともかく) 彼女は正しい。

ところで、この立場の人々がゴールドマンやキムの極端な見解を受け入れるとはかぎらない。それどころか、ある種のデイヴィッドソン的な同一性声明を認めさせするかもしれない。たとえばデイヴィスは(d)は退けるものの、ジョーンズによる狙撃と、彼が「撃て」という命令に従つたことが同一になる場合があると考へる⁽⁹⁾。

しかしいずれにせよ、デイヴィスやトムソンらのこの立場では、別の、重大さにおいて劣ることのない反直観的な帰結が導き出されてしまうのである。

まず、彼らによればジョーンズによるスミスの殺害は、ジョーンズによるスミスの狙撃の終了後もしばらく進行していくことになる。だがそうすると、われわれは不自然な現在進行形の使用を認めなければならなくなる。つまりジョーンズがスミスを撃つてからスミスが死ぬまでの間、ジョーンズがどこで何をしていようと「ジョーンズはいまスミスを殺している」と言いうことになってしまふのである。トムソンはこの不自然さに気づいている。しかし彼女はそれが重大であるとは考へない。少し妥協をして「殺す (kill)」の

用法を拡張しなければならない、と述べるのである。はたしてその修正は「ほんの少し」のものであるか。トムソンは不自然さが見かけ上のものにすぎないことを示そうとして、いざさか迂回した議論を展開しているが、その議論に説得力があるとは思えない。⁽¹⁰⁾

さらに関連して、この立場は「死後の行為」を認めることになる⁽¹¹⁾。極端な例をあげよう。アリストタルコスがコペルニクスの天動説を先取りしたことは、とにかくアリストタルコスが為したことである。デイヴィスやトムソンによれば、そのアリストタルコスによるコペルニクスの天動説の先取りは、アリストタルコスによる考え方の表明とは別の、コペルニクスによる天動説の提起を含む出来事である。しかしすると、アリストタルコスは死後何百年もの間、何ごとかを為し続けていたことになるのである⁽¹²⁾。

3. 標的の死によって狙撃が殺害に変化する という立場

狙撃と殺害の同一性を否定する前節の論者達は、しかし、デイヴィドソンとある前提を共有している。同一の出来事ならば同一の時間領域を占める、という前提である。その前提を退ける哲学者もいる。出来事の時間特定についてデイヴィドソンは誤っているが、彼の同一性テーゼは妥当である、と考える論者である。A・R・ホワイトやJ・F・フォルラートがこの立場をとっている。彼らによれば、スミスが死ぬまで「ジョーンズがスミスを殺した」と言えない

のは、その時点でもまだジョーンズによるスミスの狙撃が殺害になつていいからである。そして殺害の性質を獲得する前に狙撃を「殺害」と呼べないということは狙撃と殺害の同一性を何ら脅かすものではない、というのである。

ホワイトによれば、問題のケースでは狙撃がまだ殺害でない時期があるので、殺害と狙撃を同じように時間特定することはできない。そのため（われわれの例で言えば）「いつジョーンズはスミスを殺したのか」という問い合わせに対し、「一九九二年一月一日」以上に細密に時点が特定された答えは不可能である、とホワイトは考える⁽¹³⁾。それはトムソンの答えの一つと同じであるが、殺害を狙撃で始まり標的の死で終わる出来事と考えない点で、トムソンやデイヴィスらと異なっている。標的の死は殺害という出来事に構成要素として含まれるわけではないのである。殺害は狙撃ほど精密に時点を特定できるとはかぎらないとホワイトは述べる。われわれのケースで「ジョーンズによるスミスの殺害は何時に起つたのか」と問うことも「何時に始まり何時終わったのか」と問うことも、不適切といふことになるのだろう。ホワイトやフォルラートにとって、時刻に関しても為しうる適切な問いは、「その狙撃は何時に殺害になつたのか」だからである。

だが、「標的が死んだときに狙撃は殺害になる」という言い方はわれわれを困惑させる。いったい何がそうなるのだろうか。ホワイトは、初めて店頭に並んだときはまだベストセラーでないが後にベストセラーになる本の喩えを使っている。フォルラートは、イギリ

スの女王と、そのイギリスの女王が存在する二十六年前からすでに存在していたジョージ六世の長女との同一性を、引き合いで出す。⁽¹⁸⁾

注目すべきはむしろそのアナロジーが破綻する点である。「出来事

は、ある仕方で他の何かと関係づけられるようになるというかぎりにおいて、「変化」する」と述べるとき、フォルラートは全く正しい。しかしその「変化」は、単に関係的であるだけでなく、いわゆる典型的な「単なるケンブリッジ変化 (mere 'Cambridge' change)⁽¹⁹⁾」なのである。出来事がその種の「変化」しかしないといふ」とは、出来事も変化するところを示していくのではなく、出来事は変化しないところを示していくと考えるべきである（そもそも変化する、数のちも変化するところになってしまつだらう）。

「変化する (change)」「へとなる (become)」といった表現を額面どおりに受け取りやめる、標的の死の時点で殺害に変わるのは何かといふことが問題になる。それがすでに終了した行為、すなわち狙撃や引き金を引くことや人差し指を曲げるなどであると言うのはやはり奇妙である。ソレドハオルターは「出来事それ自体 (event per se)」ふじう考えに至る。彼によれば出来事は、出来事それ 자체としては無時間的に存在し、他方、特定のタイプの出来事の事例としてのみ時間的な位置づけをもつのである。私は、そのような大袈裟な観念に訴えずに済むのであれば、その方が好ましいと思ふ。

4. ディヴィデソンへの側からの反論

ディヴィデソンは、(e)や(f)には動じない。彼によれば、問題のケンブリッジによるスミスの殺害と、それを以前に生起した出来事が対立するいずれの立場も出来事の特徴と出来事の記述の特徴を混同している、と反論するにいたらう。すなわち、スミスの死はジョンズによるスミスの殺害という出来事に含まれるのではなく、ジョンズによるスミスの殺害という出来事の記述に含まれるのである。またスミスの死によつて、それ以前に生起した出来事が変化する。またスミスの死によつて、それ以前に生起した出来事が変化するのではなく、その出来事についてわれわれが記述しうるものが変化するのである。そして、狙撃があつた後もスミスが死ぬまで「スミスを殺した」と言えないのは、その狙撃が殺害であつたことを明らかにする材料をわれわれがまだ手にしていないからであり、かつて、殺害という行為がまだ終わっていないからでも、狙撃といふ行為がまだ殺害といふ行為になつていらないからでもない。⁽²⁰⁾

実際、ディヴィデソンの考えに沿つてしまえば、(e)は少しも奇妙でない。ディヴィデソンは、「殺すこと」は「死をひき起こす何かをすること」 (doing something that causes a death) である、と述べている。それに従えば、問題の(e)は

(g) スミスの死の三時間前に、スミスの死を引き起したジーン

ハズの行為があつた (Jones's action that caused Smith's death occurred three hours before Smith's death)

となり、奇妙な消滅しきりも。あることはあた、ハンスコムが示唆するやり方で(e)を言い換えると、

(h) ジーン一ハズによるスミスの殺害であつたじふがおもて判断する行為が、スミスの死の三時間前に起つた (The act which, as things turned out, was the killing of Smith by Jones occurred three hours before Smith's death)

となり、やはり奇妙なは除去われ。

以上の『反論』は、デイヴィッドソンの立場を敷延したものにすぎず、対抗する立場を決定的に論駁するものではない。しかし状況がデイヴィッドソンの側に一方的に不利なわけでもない。これまでで、デイヴィッドソンに対抗する立場においても同様に反直観的な帰結が生じるに至ってきたので、(e)や(f)の奇妙さは相対的に和らげられてくるに至だらう。もちろん、なお、いずれの立場も自らが抱える奇妙さを「奇妙だが真実である」と主張することができる。デイヴィッドソン的な立場をさらに進んで擁護するのであれば、(e)や(f)の奇妙さが何に由来するのかを明確にして、その奇妙さを説明しなる必要がある。残念ながらデイヴィッドソンは、その奇妙さについて、

それと和解せると述べるのみで、その起源を詳しく探っていない。しかし(e)や(f)の奇妙さはいかの興味深い論点と関わっているのである。

5. 「ジーン一ハズはスミスを殺したのか」 の多義性と行為文の論理形式

「ジーン一ハズはスミスを殺したのか」という形の問いが多義的であるならば、早くから指摘されていた。⁽²³⁾ たしかに、問題のケースで「1日の正午」と答えてや、「午後三時」と答えても、それぞれ文脈に応じて適切である。」の多義性は、じつば(c)の文「ジーンズがスミスを殺した」が「種類の出来事に關わつて見る」とに由来している。そのことは、デイヴィッドソンが一九六七年の論文の中で行為文(出来事文)の論理形式について述べたこととすれば、このように聞こえるかもしれない。⁽²⁴⁾ そこで提案された仕方で(c)の論理形式を表記すると次のようになるからである。

(i) (Ex) (Killed (Jones, Smith, x)).

しかし「殺害」を「死を引き起す何かをする」と考えるべくイヴィッドソンからすれば、当然次のような論理形式も付け加えるべきだつたのである。すなわち、

(j) $(\exists x)(\exists y)(\text{Action}(x, y) \& \text{Died}(y, z) \& \text{Caus-ed}(x, z))$.

(k) $(\exists e_1)(\exists e_2)(\text{Action}(e_1, e_2) \& \text{Was_dead}(e_1, e_2) \& \text{Caus-ed}(e_1, e_2))$.

」の(j)を見れば、「ジニアーズはスミスを殺したのか」が、ジニアーズによるとスミスの狙撃の時点（それは殺害の時点と同じである）を尋ねて居るのか、それともスミスの死の時点を尋ねて居るのか、ところが「死ぬ」の時は明確である。デイヴィッド自身の曖昧さについて、一九八五年に出版された論文で言及している。デイヴィッドソンならば、「このジニアーズによるスミスの殺害は起因だったか」と聞いていれば多義的ではなかつた、⁽²⁾むづつだら（答えはどちらん「正午」である）。

文「ジニアーズがスミスを殺した」が量化する出来事はジニアーズによるスミスの殺害だけない、とデイヴィッドソンは考えなければならない。その文が量化するあら一つの出来事、すなわちスミスの死は、ジニアーズによるスミスの殺害の「結果」であると言へば、これができる。同様のことは、「撃つ」や「被害者の妻を悲しませぬ」についても言える。前者は「標的的身体への弾丸の貫通をひ起き」す何かをする」く、そして後者は「被害者の妻が悲しむ」とをひき起す何かをする」く、言い換えることが可能だからである。一般に「 x_1 は x_2 をやした ($x_1 \phi ed x_2$)」の形をした行為文の多く（全てではない）が、次のような論理形式をもつと言えるだろう。

(j) や (k) のような行為文の論理形式の新しいヴァージョンは、一九六七年にデイヴィッドソンが与えた形のものでは説明し切れない多くのことを説明する。たとえばそれによって、「七時に爆破する」と予告して七時に時限爆弾を仕掛ける爆弾犯が誠実でない」とも説明できるのである。⁽³⁾

さて、われわれの問題に関するには以下の(j)が明らかになる。(j)まで(e)「スミスの死の三時間前にジニアーズによるスミスの殺害があった」と、(f)「スミスが死ぬ三時間前にジニアーズがスミスを殺した」をあまつ区別せずに扱ってきたのであるが、(e)と異なり(f)は正しくないことを悟つて居る可能性がある。つまり、(f)の「三時間前に (three hours before)」が、その後（英文では左側）の文が量化する1つの出来事の両方に、その前（英文では右側）の文が量化する1つの出来事を関係づけているのだと解釈すれば——すなわち、殺害というジニアーズの行為とその結果であるスミスの死の両方に、スミスの死を関係づけているのだとすれば——(f)は正しいことになるのである（スミスの死がスミスの死それ自身に先

行する」とはありえないから)。

さらに「スミスがジョーンズに殺された」は、「ジョーンズがスミスを殺した」と論理形式において区別はないが、語用論的に異なつておる、それが量化する二つの出来事のうちではスミスの死の方を『前面に出して』⁽³²⁾ いふかわいとができるかもしれない。よつて(f)から

- (1) スミスは死ぬ三時間前にジョーンズに殺された (Smith was killed by Jones three hours before he died)

この書き換えは同値変形のようであるにもかかわらず、その語用論上の含みから(I)はいつそう受け入れがたく感じられるのである。⁽³³⁾もし(I)の「三時間前に」がスミスの死とスミスの死を関係づけているとしか解釈できないのであれば、(I)は誤りになる。だがそのように(I)や(f)が偽であるかもしれないといふことは、デイヴィッドソンの立場を脅かすものではない。というのは、かりに(f)や(I)が偽であるとしても、妥当でないのは(e)からそこ)に至る推論だからである。⁽³⁴⁾

なぜ、スミスが死ぬまで「スミスを殺した」と言えないのだろうか。私の考えでは「ジョーンズがスミスを殺した」と言うのが真であるには、その文が量化する二つの出来事の時点がともに発話の時点より前でなければならない⁽³⁵⁾。したがつて、ジョーンズによるスミスの殺害である行為がすでに終了し、そのうえスミスの死がもはや(医学的に見て) 確実であったとしても、スミスの死が生起しない

かぎりそのように言うのは正しくない。われわれの例で一月一日の午後一時半に「ジョーンズがスミスを殺した」というのが真でないのは、ジョーンズによるスミスの殺害が終了していないからではなく、スミスの死がまだ生起していないからなのである。

6. 過去の出来事の再記述について

殺害の時間の問題は、デイヴィッドソンの同一性テーゼを退ける決定的な論証を提出しなかつた。もちろんそのじぶんがテーゼの妥当性を証明するわけではない。ただ、前節で提示した行為文の論理形式の新ヴァージョンは、そのテーゼを受け入れることの有利さを間接的で示しているように思ふ。たとえば、デイヴィッドソン的な立場から、以下の事柄をうまく説明することができる。次の文を考えよう。

- (M) ジョーンズによつてスミスの殺害は正午にあつた。(The killing of Smith by Jones occurred at noon.)

この点と異なり、

- (N) ジョーンズはスミスを正午に殺した (Jones killed Smith at noon)

が出来事の生起の時点の特定に関して多義的であることは、すでに示したとおりである。ここで述べたいのは(i)と次の(o)との類似性である。すなわち

(o) 『バルシファル』の作曲者は一八一三年に生まれた。

上の(i)と(o)においてまず問題となつてゐる出来事はそれぞれ殺害と誕生であると考えるべきであろう（そのことは必ずしも論理形式によつてのみ分かるわけではないかもしないが）。しかし二つの文は、それぞれスミスの死および『バルシファル』の作曲という後の出来事の存在を示唆している。すなわち(i)も後の出来事が生起して初めて可能となるようより以前の出来事の記述を含んでいる(か、少なくとも暗示している)³⁴。ゆえに、(n)同様、スミスの死がすでに生起したこと(も午後一時半に述べられると偽になる)のである。

「スミスの死によってジョーンズによるスミスの狙撃が殺害になつた」という言い方はある意味で正しい（それでも「スミスが死んだとき、ジョーンズによるスミスの狙撃が殺害になった」と言うと少しおかしく聞こえる）。われわれはきわめて自然に「リヒャルト・ワーグナーが『バルシファル』を作曲したこと」で、「死」ヨハナは『バルシファル』の作曲者の母になつた」と言うのである。ここで「死」になるという動詞は周辺的な意味で使われている。同じような意味で、一般に出来事は「ついこの間の出来事」から「ずっと前

の出来事」になつていく。変化するのは——この例が鮮やかに示すように——出来事ではなく出来事に対するわれわれの語り方なのである。

前節で(f)が誤りになるような解釈を示した。それを別にしてもなおその(f)や、そして(e)に奇妙な響きがあるとすれば、スミスが死ぬ前にジョーンズのある行為をスミスの殺害として語りえたかのようない印象を——言い換えれば、ジョーンズがスミスを狙撃した時点でスミスの死が生起することが決定されていたかのような印象を——それらから受けるためであろう。しかし(e)や(f)にそのような含意はない(e)や(f)が真であるなら、スミスの死が生起したということは決定的であるが)。発話の時点に注意する必要がある。(e)や(f)は、スミスのその死という個別的な出来事がすでに生起してしまった時点から溯つて、過去について何とかを語つてゐるのである。(e)や誤りとされない解釈における(f)が(o)などと共有するのは、そうした遡及的な語り方である³⁵。最近の出来事ほどそれについて多くのことを語りうる、という直観に惑わされてはならない。われわれはすでに生起した出来事について、ある期間ある事柄を語りえないのである。ある出来事をまさに目の当たりにしたとしても、今後それがどのような出来事として記述されることになるかを言うことはできない。その意味で過去が未来に対して開かれているという結論は、別段目新しいものではない³⁶。ただ、時間の経過とともに過去に次々と新しいベースペクティヴをえていくというわれわれの認識活動のパターンが、「殺す」のような非常に基本的な動詞の中にさえ見い

出される事実には、少しばかり驚いてよこかおしれない。

英

(一) L.H. Davis, "Individuation of Actions" (1970); J.J. Thomson, "The Time of a Killing" (1971).

(2) 日本語は「出来事の名を作り」るが特有の困難さがある（それはたゞ、定説調に相違するものが無くなるだけではなし）。

したがって、生じるかもしねば、曖昧を回避するため、例文には英文を併記する。だがいやにせよ、リード論じる殺害の時間の問題は英語においても日本語においても生じる問題である。

(3) たとえば D. Davidson, "Actions, Reasons, and Causes" (1963), p.4 よりは "Agency" (1971), pp.57-58 を参照。

(4) 特定の種類の同一性声明を受け入れるか否かを指標にして、出来事における「あるの」をややかばらべての様々に異なる立場を、区別すればよいが、それがどうあるだらう。たとえば

(i) ジムムが歌つたり=ジムムが大声で歌つたり (John's singing=John's singing loudly)

など

(ii) ジムムがスイッチを入れたり=ジムムが明かさないつたり (John's flipping the switch=John's turning on the light)

この二つ、A・カール・ペーテー・キムは(i) (iii) のいずれも「かなる状況下であれ不可能である」と考える。また、(i) のような同一性声明にかかる可能性あると言える論者もいる（社説を読む）。トマス・ハイドンは、「(i) はもちろん、(ii) のような形の同一性声明も適切な状況のもの可能であり、しかも出来事に関するわれわれの知識の中で重要な

位置を占めるに考える。その意味で、(i) の形の同一性声明を認めるのはデイヴィッドソンの考え方を特徴づけてくると言わんがいい。)のようないくつかの立場は、G・E・M・ランズロットの有名なボンバ操作者の議論に由来するものである。ソリドー、(ii) の形の同一性声明を「へによい」(by)」の関係によって規定すると言われば、

(iii) ジムムが手を上げたり=ジムムが命揚げたり (John's raising his arm=John's signalling)

は(i)の回タイプと見なされねばやうであらう。いろいろが、(iii) のよりな同一性声明は適切な状況のふたつ可能であるが(iii)は認められぬ、といふ立場も考えられる。i)の論文の議論とは関係しないが、"トマス・ハイドン"の同一性ホーリーは曖昧さが無くわけではなく（社説を読む）。

(iv) A. Goldman, "The Individuation of Action" (1971), pp.767-768, や J. Kim, "Events as Property Exemplifications" (1975), p.169, fn.22.

(5) 行為の実行 (doing of the action) や出来事のカタログから厳格に区別する哲学者がいる。N・カントーは、出来事は連れて行為の実行は時間の特定ができないから「こと」と考える (Z. Vendler, "Agency and Causation" (1984), n.12)。したがってわれわれが「へジムムがババを殺したのか」についてよく答えるのが「こと」であれば、それは問い合わせがカタログか、"ステイクだからである。)の立場において殺害の時間の問題はそもそも生じないが、デイヴィッドソンの正面から衝突するにまゐる。よひりのうした考えはここで論じたいがばなし。

(6) L・ホイギィス、J・J・トマソンの想い、M・C・シトズローが同様の見解を述べて居る (M.C. Beardsley, "Actions and Events" (1975))。また、「非原初的惹起 (non-primitive causing)」などへ懸念の問題を捉えるI・タールバーグも、結構ばらばらした立場をとる

トマソン (I. Thalberg, "When Do Causes Take Effect?" (1975))^o

(∞) Thomson, "The Time of a Killing," pp.122-123.

(o) われわれのケースで、スミスを撃つもハーネズが命令されていたとする。デイヴィスによれば、その場合ハーネズがその命令に従つたことはハーネズによる狙撃より最も短くもないのに、それらは同一の行為である (Davis, *op.cit.*, p.529)。ビアズリーも同様の見解を述べてゐる (Beardsley, *op.cit.*, p.269)。彼らがデイヴィドソンの同一性テーマを「部分的に認め」、「いふほなるのかどうかは、そのテーマをどう規定するかに依り、ある程度故意的な事柄である。一方、トムソンはいかなる意味でもトイディソンの同一性テーマを認めないが、コールマンのような立場を拒否してゐる (Thomson, "Individualizing Actions" (1971))^o。(注4参照)

(2) Thomson, "The Time of a Killing," p.127. トムソンは例を変えて

「」の不自然さを軽減しようとする。彼女は次のような状況を想定している。ある人が電熱器のスイッチを入れる。彼はそばにしてチヨコレートが溶けていくのを見ながらじっと待っている。しばらくしてチヨコレートが完全に溶ける。」のと、チヨコレートを溶かす「」に関連して彼が行なった動作は電熱器のスイッチを入れるさいに指を動かしたことにより尽くされるにもかかわらず、電熱器のスイッチを入れてからチヨコレートが溶け切るまでの間の任意の時点で「彼はいまチヨコレートを溶かしている」と言ふことができる。しかし「」にはトライックがある。チヨコレートを溶かす例は問題の殺害の例とパラレルではないのである。トムソンは話の中に「彼はそばにしてチヨコレートが溶けていくのを見ながらじっと待つてゐる」というエピソードを紛れ込ませてゐる。だがこの場合、「そのとき彼はそれを溶かすためにいかなね」といってはならない。トムソンはできないと思う。チヨコレートを溶かすのはトムソンの例ではスプレーを作るという作業の「」種として述べられるのであるが、その文脈において待つ「」 (waiting) は——そばに立つて見ている」と付

け加えるまでもなく、単に待つ「」とだけで——れきとした行為なのである (それはライルが述べたような意味で「ネガティグな」ものであらうが)。彼女は「チヨコレートを溶かす」という動詞を「溶けたチヨコレートを用意する」のような意味で——すなわち、溶けるのを待つたり、そのためには溶けたチヨコレートを次の容器に移し変えたりする」とまでをも覆うような意味で一使つてゐるのである。電熱器のスイッチを入れ終わつたあとも「彼はいまチヨコレートを溶かしていぬ」と言ふことができるのはそのためである。

(11) ただしビアズリーは、死後の行為を進んで受け入れようとする (Beardsley, *op.cit.*, p.270)。彼に従えばわれわれは、死ねばできなくなる「活動 (activity)」のはかに、死後も為し続けられるような「行為 (action)」の観念をもつことにになる。だがそのような「行為」の觀念は、まだわれわれが抱いてゐる行為の觀念と著しく異なるものであつた。

(12) 「」の節で述べたデイヴィスやトムソンの立場に対しても、田舎の言葉使いが有利な証拠を提出するように見える場合がある。つまり、いざにわれわれは被害者の死をも含む出来事を指して「殺害」と叫んでやる。」には、「殺害」と「殺害事件」を区別する必要がある。スミス殺害事件は、複合的な(そして場合によっては非連續的な)出来事であり、ジヨーンズによる狙撃という行為だけではなく彼の銃から発射された弾丸の飛行やスミスの死といった出来事をも部分として含んでいる。だがそのような殺害事件が、全体として、誰かの行為である」とはない。したがつてそれは、狙撃の行為と同一視されうるようなものではないのである。デイヴィドソンの側からすれば、トムソンやトイヴィスは殺害と殺害事件を混同して「」などができないだらう。

(13) A.R. White, "Shooting, Killing and Fatally Wounding" (1979); J.F. Vollrath, "When Actions Are Causes" (1975). ただ、トムソンは、時間に関する特定の表現が非外延的な文脈を形成すると考えてデイヴィスの同一性テーマを残す道を——彼女自身そのような選択肢は

取らなかった——長嶋久義 (Thomson, "The Time of a Killing," pp.128-130)。

(14) White, *op.cit.*, p.7. ホワイトの例は、一九七五年の四月に書いた晝説。おのれの十四歳の同僚が読んで感情を書かれたらしい。彼によれば「私が同僚の感情を書いたのは、四月の十四歳からの間の期間であるべく、やがて一九七五年なのである」 (*ibid.*)。Vollrath, *op.cit.*, p.335 も認む。

(15) White, *op.cit.*, p.8.

(16) Vollrath, *op.cit.*, p.336.

(17) *ibid.*, p.338.

(18) P. Geach, *God and the Soul* (1969), p.72 も論證。単なるケーブラッカ変化の典型としてギークがあげるのは、11世紀のある学生に尊敬されるふるいじだりいドンクルテスが彼の『變化』へこたるものであつて。彼はそれを「この変化」として提出した。

(19) Vollrath, *op.cit.*, p.338.

(20) Davidson, "The Individuation of Events" (1969), p.177. ホイギヤム・ハサウェイ一九六九年の「鑑文の女」。王室前の郵便船の貯水タンクに毒を入れるヒロインが船内毒殺した場合、「その宇宙飛行士が死ぬずつとも前に私は彼を殺してしまった」 と聞へるのは正し、アリトラン。

(21) たとえば Davidson, "Adverbs of Action" (1985) を参照。「結果の時点」到達する以前で、われわれはある行為を、そのような結果をもつて行為をして語る人が多い。しかし結果への到達がその原因「その行為」を述べるのではない。変わるのはただ、…われわれがそれ

(Ex) (Ey) (Killed(Jones, Smith, x) & Action(Jones, x) & Died(Smith, y) & Caused(x, y)).

この形で表してもよろこだら。やむ止むるやうの例では、「Action(Jones, x)」 がよりよく「Shot(Jones, Smith, x)」 へ置き換えてみる (やむ止むる) 「彼が彼を殺した」 の論理形式以上にみる。

(22) Davidson, "Adverbs of Action," p.237.

(23) 例へば、マムヘントンにはあるが、因果分析の問題だけ行為が行為の結果をも量化してみると考へる論者は、(そのよくな考へに転向した論者も含め) 近年多く。ホイギヤム・ヒロインの論議の一九八五年の論文においてその考へを示唆している (*ibid.*, "The Logical Form of Action Sentences," p.125-126 と比較せよ)。また、やドン・ダコブー (Lombard, *op.cit.*)、ヒューラム・ヴェンダー (Vendler, *op.cit.*)、ホジニア・ホーリー (J. Hornsby, *Actions* (1980), pp.124-132)、T. ペーリー・ペルス (T. Persons, *Events in the Semantics of English* (1990), p.161) やらへだ人々が、同様の (規範とは類似した) 考へを、壁上に示してゐる。

(24) 口へバーレー、「 x が y である」 (x ϕ ed y) の形をした文の多くが、「 x が y である」 (y 's being ϕ ed) もち起りかかる。

(25) Davidson, "Agency," p.58.

(26) Anscombe, *op.cit.*, p.227. ハーバードの方法を、ハーバードの

口へバーレーは別種の奇妙な取り除くために使つてゐる。

(24) たゞれば「オルバークが」の点を指摘して云ふ (Vollrath, *op.cit.*, p.333)。ただし彼はそりない、同一の行為など同一の時間領域を口へバーレー考への放棄へと議論を進めるにあらず。

(25) Davidson, "The Logical Form of Action Sentences."

(26) もやのん (y) における「 x が y である」 (x ϕ ed y) が定義によって、ハーバードはもやねバーレーの殺害にはかなひない。そりで同一行為が (x) を真にやるゝことを明確にやめために、

を取る立場のところ、絶対的な公的行為の表現などは極めて多い（たゞ

アベラ Thalberg, *op.cit.*, p.584) ので、彼の立場は「被り立場」だとの趣

及的な誰の方を説明すべきかが問題となる。されば、一九六〇年代は A. C. Danto が、歴史叙述を分析した専

門的な著書の多く強調したり（A. C. Danto, *Analytical*

Philosophy of History (1965))。

(83) たゞ、そのような形は分析可能な全ての論理上に成立する。アーヴィングが

述べたように、*「私たちは常に現実の世界を分析するべきである。*」

参考文献

- Ainscombe, G.E.M., "Under a Description," *Nous*, 13(1979), 219-233.
Beardsley, Monroe C., "Actions and Events: the Problem of Individuation," *American Philosophical Quarterly*, 12(1975), 263-276.
Bennett, Jonathan, *Events and Their Names*, Hackett Pub., 1988.
Danto, Arthur C., *Analytical Philosophy of History*, Cambridge U. Pr., 1965. [原題「事件と歴史」『事件と歴史』(翻訳: 田中義典・山口洋一郎・大庭義之) (1982年)]
Davidson, Donald, "Actions, Reasons, and Causes" (1963), in *Essays on Actions and Events* Oxford U. Pr., 1980 [原題「事件と理由」『事件と理由』(翻訳: 田中義典・山口洋一郎・大庭義之) (1982年)]
_____, "The Logical Form of Action Sentences" (1967), in *EAE*, 105-148.
_____, "The Individuation of Events" (1969), in *EAE*, 163-180.
_____, "Agency" (1971), in *EAE*, 43-61.
_____, "Adverbs of Action," in B. Värenzen and M. Hintikka (eds.), *Essays on Davidson: Actions and Events*, Oxford U. Pr., 1985, 230-241.
Davis, Lawrence H., "Individuation of Actions," *The Journal of Philosophy*, 67(1970), 520-530.
Geach, Peter T., *God and the Soul*, Routledge and Kegan Paul, 1969.
Goldman, Alvin I., "The Individuation of Action," *The Journal of*

Philosophy, 68(1971), 761-774.

Hornby, Jennifer, *Actions*, Routledge and Kegan Paul, 1980.

Kim, Jaegwon, "Events as Property Exemplifications," in M. Brand and D. Walton (eds.), *Action Theory*, D. Reidel Pub., 1975, 159-177.

Lombard, Lawrence B., *Events: a Metaphysical Study*, Routledge, 1986.
Parsons, Terence, *Events in the Semantics of English: a Study in Subatomic Semantics*, MIT Pr., 1990.

Thalberg, Irving, "When Do Causes Take Effect?", *Mind*, 84(1975), 583-589.

Thomson, Judith J., "The Time of a Killing," *The Journal of Philosophy*, 68(1971), 115-132.
_____, "Individuating Actions," *The Journal of Philosophy*, 68(1971), 774-781.

Vendler, Zeno, "Agency and Causation," *Midwest Studies in Philosophy*, 9(1984), 371-384.
Vollrath, John F., "When Actions Are Causes," *Philosophical Studies*, 27(1975), 329-339.

White, Alan R., "Shooting, Killing and Fatally Wounding," *Proceedings of the Aristotelian Society*, 80(1979-80), 1-15.

* 1) その論文は、原稿提出日から約1ヶ月後（1961年4月11日、原大会館）に受けた査査の草稿をもとに書かれています。査査を受けた後も、原稿を手にした参加者の方々に、意見を申されたこと。